禅宗と在家仏教徒
―若き日の辻光文―僧侶ではなく在家仏教徒として生きるまで―

安　田　三江子　澤　野　純　一

禅宗に関心をよせる人の実践がさまざまな分野で私たちのくらしに大きな影響を及ぼし、くらしの創造に貢献している。その実態と理由の探求のため、禅宗及び禅仏教徒の思想と行動を研究することは重要であるといえよう。

本稿では、児童福祉分野における実践者辻光文が、僧侶ではなく在家仏教徒としてみずからの道を生きていくようになるまでを考察することから、このテーマにせまる。若き日の辻は、他人のつらさにいてもたってもいられず、ほんものの生きかたを、切に探求し、苦闘のなかにあった。やがて、辻は師である柴山全慶を通じ、あらゆる場で禅仏教徒としての実践があることを体得する。そして、在家仏教徒としての道を歩むようになる。

辻は、自ら及び向き合うひとやことがらに対し恐ろしいほどに真摯である。そこには「勢い」とでもいえるものがある。この「勢い」は、実は、禅仏教徒のひとつのあらわれではないだろうか。「勢い」が自らの行為が展開する「現場」への強い志向となり、実践となってあらわれ、その実践がさらなる実践をよび、「螺旋」のように展開していく。この禅仏教徒の「螺旋」こそが、人びとのくらしに大きな影響を及ぼす実践として展開していくのであろう。禅への理解を深めるとともにこの「螺旋」についての解明が今後のテーマといえる。

もちろん、辻が在家として生きることになったのちの、福祉分野での実践の考察も、今後も、引き続き探求すべきテーマであることはいうまでもない。

キーワード：禅宗、在家仏教徒、辻光文、職業倫理、

The practice of the person who has interest in Zen Buddhism greatly influences our lives in various ways. To explore the situation and reason, It is important that we study the idea of Zen Buddhism and the practice of Zen Buddhists. By studying the process that Kobun TUJI - a practitioner in the field of child welfare - comes to live in his way as a lay Buddhist in life, not as a priest, we approach this theme.

TUJI, when young, was not able to bear the pain of other people. He struggled seriously with this. Through his experience with Zenkei Shibayama - a Zen Master - TUJI had learned that the practice of the Zen Buddhist can be found everywhere. And so, TUJI had come to walk the road of a lay Buddhist.

TUJI was very faithful for a person to meet a person and a matter to meet. So to speak, There is a ”force”. In fact, would not this "force" be one of expression of the Zen Buddhist? This "force" becomes the strong intention to "the scene of the practice" that own act presents, the Practice call further practice and develop it like "a spiral". This "spiral" of the Zen Buddhist would unfold as practice to have a big influence on the living of people. We immediately must deepen understanding to Zen, and to go to the elucidation about this "spiral"

Of course it goes without saying that it is the theme that the consideration of the practice in the field of welfare of TUJI should search in the future.

Key words : Zen Buddhism, Lay Buddhist, TUJI Koubun, Occupation Ethic

1. はじめに

禅宗に関心をよせる人の仕事が、私たちのくらしに大きな影響を与えている。

IT（情報技術）企業のアップルの創業者故スティーブ・ジョブズ氏、京セラの創業者の稲盛和夫氏が、禅への強い関心を明らかにしている。この他にも、さまざまな分野で禅に関心をよせる人は多い[1)]

これらの人びとの、個人のありかたは、大きく異なる。しかし、企業の基軸とでもいうべき、商品（サービスも含む）の誕生と、それが実際に展開していく「現場」への深い志向があり、金銭をこえた何か（筆者らは、仕事そのものの魅力から仕事をしていく、つまり、内発的動機づけそのものと考える）が仕事への動機づけとなっており、自らも含めた人びとの新しいくらしへの貢献が、実践の原動力となっていることは、共通であるように感じられる。

もちろん、社会福祉の分野でも、禅宗に関心をもち、仕事そのものにひきつけられ、そこからさらに仕事を展開していくひとはいる。だが、福祉の分野の人びとは、日常のなかにおり、大きく目立つことはない。とはいえ「よい実践」がうまれ、人びとのくらしが豊かになっていく、このことは、共通である。

なぜ、禅仏教に関心をよせる人びとがこのような実践を展開しているのか。それは教義と関係するのか。禅宗及び禅仏教徒の思想と行動を研究することが重要である。本稿では、教護院（現、児童自立支援施設）で、教護（現、児童自立支援専門員）を長年つとめた辻光文（1930-　）をとりあげる。教護院とは、家庭での養育に困難があり非行的傾向をもつ子どもの育ちを支える児童福祉施設である[2)]。そこで実践を担う教護は、子どもと寝食をともにし、子どもの養育にあたる。本稿では、辻が、僧侶としてではなく、在家仏教徒として生きるにいたるまでの若い日々に焦点をあて、以上の課題について考察する。

辻は、秋田県の臨済宗妙心寺派の寺院に生まれた。南禅寺派管長もつとめた柴山全慶（1894-1974）に僧侶としての将来を強く嘱望されるも、僧侶としてではなく、一般の生活を営みながら仏教に帰依をする在家仏教徒として生きる。

後年、辻の実践は、自ら「もし禅が心の名であり、生活であるというのなら、こうしてこの子等と精一杯生きるいのちがそのまま仏教でなければならぬと思うものである」、とされていくものになる（辻 1998：221）。

辻は、関西の児童福祉分野では知られた存在ではあるが、いわゆる著名人ではない。だが、まさしく「現場」への深い志向をもち、実践そのものがさらなる実践への動機となり、人びとの新しいくらしに貢献していったひとである。このような辻への子どもからの信頼は厚い。また子どもに限らず、多くの人びとから敬愛を集めている。宗教は、日々のくらしのなかで、その実践がみられて、宗教たり得るといえるであろう。辻は、まさしく、本研究の端緒としてふさわしい。

なお、日本では、意識されることなく、禅宗も含め仏教が人びとのなかに根をおろしており、これが、人びとの働き方に大きな影響を与えている可能性もある。これもまた大きな研究テーマであるが、これへのアプローチのためにも、まずは、本研究課題から、はじめていきたいと考える。

2. 先行研究

宗教を展開していくのは、それに専念するプロパーの人びとであり、仏教であれば、主として出家をした僧侶である。一方、従来の仏教学研究は、仏典や教理の解釈、僧侶及びその思想の内容や変遷（法系）を中心にすすめられてきた。この研究は仏教学の根底をなし、まさしく王道である。そしてこのことは、今後も変わらないであろう。

しかしながら、宗教は、それに専念せず、他に活動の領域をもつ、いわゆる在家信者もいて、展開していく。仏教の理解をするにあたり、僧侶、及び、在家仏教徒の研究が必要になっていくであろう。

禅仏教学者の沖本克己は、仏陀について、以下のように記している（沖本 1990：67）。「もともと、仏陀は、新興商人階級の抬頭という社会情勢のなかで、その新しい時代が要求する新しい思想

を様々に打ち出した自由思想家、つまり沙門の一人であった」。仏陀の時代でいえば「新しい時代に新しい思想を要求」した人びととは、プロパーの僧侶にはならず、仏教という新しい思想の信者になったであろう。そして、これらの人びとは、現在では、在家仏教徒といえよう。この研究を深めていくことは、仏教を理解していくためにも重要なことであると考えられる。

宗教における信者研究の代表的な著作には、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムと資本主義の精神』（Weber,1920, 大塚訳）があげられる[3]ウェーバーは、敬虔なプロテスタントの宗教教育をうけた労働者の生産性が高いことに注目した（Weber=1989:68）。プロテスタントにおいては、勤労は神の意思の実現でもあり、勤労に励むことが人びとに肯定されるようになったとし、このエートスが西欧における近代産業社会を成立させる基盤になったと結論をだしている（Weber=1989 344-345）。

仏教についても、仏教を宗（おおもと）におき、人びとのいきかたやくらしのありかたをみる研究は重要であるといえる。在家仏教徒の研究は、浄土系仏教における妙好人の研究はなされており、鈴木（1948）、楠（1987）などがあげられる。小倉（1990）などによる浄土真宗と近江商人に関する研究もある。

しかし、禅宗における勤労思想においては、江戸時代の禅僧鈴木正三の思想を近代資本主義の精神の源流とする中村（1949）を端緒とした諸研究もあるが、在家の禅仏教徒に着目した研究を、筆者らは寡聞にして知らない。

だが、これらのことは、実感的にも知られてきた。かつて、本学の学長を長くつとめた山田無文とも交流があった司馬遼太郎は、室町時代に海外に進出した堺の商人の拠りどころは禅であり、大徳寺再建に伴う巨額の財はこれらの商人によって拠出されたとしている（司馬 1994：48-49）。禅宗の在家仏教徒に着目した学問的アプローチは、重要であるといえよう。

3. 研究対象

本研究で、対象とするのは、出家ではなく、在家の仏教徒である。なかでも、禅を知りながら、出家ではなく、くらしの基盤が別の分野にある人びとの思想とその行動である。

その研究の端著として、本稿では、花園大学出身の禅仏教徒辻光文を対象とする。辻光文（1930-）は、若き日に柴山全慶に私淑したものの、世間一般に身をおき、まずは、大阪市の児童養護施設（1957-1961）に勤務をした。そして、児童自立支援施設（旧教護院）（1961-1985）で、長年、児童福祉の実践者として生きた[4]。

辻は、定年退職後は、花園大学での非常勤などで勤務しながら、「えにし庵」と名付けた自らの住居を開放した。そして、地域の方と交流しながら、障害や高齢の方などもふくめた多様なひとびとの豊かなくらしの実現にむけての活動をした。

辻の花園大学の教員歴（非常勤講師）は、1981年４月１日から2002年３月31日まで、22年にわたった。非常勤教員の定年退職後も、引き続き、学生相談室カウンセラー、就職アドバイザーなどを、2002年４月１日から2005年３月31日まで、４年間にわたり務めた。

辻はいわゆる著名人ではない。だが、禅はもともとその名をなさぬ人のなかにあっても、具現化される。もとより、宗教は、市井の在家信者があり、その生きかたに宗教が表出してこそ、その基盤は形成されていく。市井のひとである辻は、この研究の端著には、まさしく、ふさわしいのである。

辻が在家信者として、職業をもち、社会福祉の分野で実践をしていくようになるのは、教員などの生活を経て、花園大学にもどり、そののちに、児童福祉に関わってからのことである。本稿では、それ以前の幼年期から青年期までの若き日の辻を検討する。この時期の辻を探求することは、大変重要である。

なぜならば、辻は「生きるということは人間にとって何だろうか」という問いを問い続け、児童福祉の実践者となっていく。この問いは、仏教の問いそのものでもあると言え、一人の人間が一生の間、問い続けて解けるか解けないか、という巨

大な問いである。辻のこの問いの源は、若き日々にある。そして、この時期が、母体となり、辻は、在家仏教徒として、他者の生に真正面からかかわる、福祉の実践者となっていく。

4. 研究の方法

辻本人、親族、辻とかかわった人びと、それぞれへのインタビュー調査と、辻が記した文章の分析を通して、この課題にせまる。

辻本人、実弟の辻存之氏、元花園大学教授竹沢喜心氏（元自立支援施設園長）、花園大学教授津崎哲郎氏（元大阪市児童相談所所長）、辻に直接指導をうけた卒業生１名にインタビュー調査を行った。辻存之氏におかれては、書簡も交換させていただくなど、さまざまに、研究へのご協力をいただいている。

なお、筆者のうち、安田は、花園大学で、1996年から2005年まで、社会福祉実習の指導や学生指導などで、ご一緒させていただいており、そのときの交流が、本研究に活かされている。

辻が記した文章は、単著では辻（1998）、共著では、和田・辻（1984）がある。

辻の学会誌への寄稿には辻（1999）、辻（2002）などがある。

さらに、児童自立支援施設に入所をしていた子どもたちとの文章によるやりとり（日記指導）、書簡、花園大学など内部文書（時期不明のものもある）、地域活動における文書など、辻が記した文書は多岐にわたる。とりわけ、辻の在職中を知る津崎氏は、「日記指導には、実践者としての辻の神髄があらわれている」、と述べる。

多様な資料の分析は重要であるが、本稿で研究対象とする若き日の辻については、辻（1998）がもっともくわしい。これは、存之氏によると、発表当時、辻自ら、自分の思想がもっともまとまったものであるとしたという。そのため、本稿では、主として、辻（1998）から考察する。

研究の視座については、禅宗史研究のオーソドックスなそれを踏襲する。「われわれにみえる風景を特別な視点や視座を設けることなく、自然体であるがまま」（沖本1990：15）ということを大事にする。しかし、これは単純ではない。沖本は「常識に塗り固められた視界に映るものだけが真実ではあると誰も思わず」とし「あるがまま」ということには「単なる現状肯定を越えたかなり困難な自覚が必要」になるとするからである（沖本1990：15）。

また「歴史は過去の事実であり・（中略）・・時の河はだれにも渡れはしない」ため、「人間が歴史に対する時、そこには自ずと限界がある、という分かりきった事実」にも向かい合う姿勢が大事であるとする（ 沖本1990：16 ）。

研究対象者の言葉や記録は、あえて言及する必要がないほど、大事である。だが、沖本は「人の残した言葉より、その人の歩んだ具体的な生き方の全体が示す意味の方が、宗教の、とりわけ実践を重んじる禅宗の立場にとってはるかに重要なはず」とする（沖本1996：57）。

以上をふまえ、対象となるひとの言葉、行動、そして、それにかかわる人びとの証言を分析していくが、言葉や記録をも、辻光文の仏教徒としての一環にすぎぬと認識し、そのうえで、辻の実像の解明に迫ることを試みる。

なお、インタビュー調査や文献などを通じた研究成果の公表に関しては、それぞれの方に、了解をいただいている（詳細に関しては謝辞参照のこと）。

5. 本論―辻光文と在家仏教徒への道―

(1) 禅寺に生まれ、育つ

辻は、1930（昭和5）年1月2日に秋田県の臨済宗の寺の次男として生まれている。辻（辻1998：161）によると「葬式と法事以外はほとんどしていないという様なお寺」ということになるが、しかし、この言い回しには、辻の仏教と寺のあり方に対する深い思い入れが加味されているというべきであろう。

後年、辻は自宅を開放し、さまざまな人びとが集いあえる場所（辻は「えにし庵」と名付けている）にする。辻はこのかたちに「寺」の実現を思ったのかもしれない。

さて、小学生の頃のことについて、辻はこう述べている。

> 小学校では虚弱児童として、当時としては異例の配慮によるものであろうが、昼食はいつも二、三人の仲間と一緒に小使い室の隣で、特別給食を受けていた。「泣きべその光ちゃん」というのが私の子供の頃のアダ名である。就学時も、すでに姉も兄も普通に通っている小学校にさえ、みんなとは絶対に行けぬ今で言えば登校拒否児であった。どんな手こずらせ方をしたのか登校にはいつも母が付き添った。それだけではない。母を離れては教室さえ一歩も入れず母と机を並べて過ごした日々を覚えている（辻 1998：3）。

辻の生まれた寺は、檀家四百軒程の大寺で、子どもの頃から葬式が多かった。1935 年（昭和 10）年前後（つまり世界大恐慌後にあたる）の窮乏の東北農村には物乞いの親子連れがやって来て、辻の母がこっそり衣類やお米をあげていたそうである。

葬式と施し。このような環境のなかで、辻は「人の死の問題と、不平等な貧しさは、わけもなく子どもの頃からの私の悲しみとなった」と述べる（辻 1998：4）。

また、存之氏によると、例えば、辻は「それなりの」弁当を学校に持って行くことができるのだが、クラスの中でもっとも「貧相な」弁当でないと落ち着いて食べられない。クラスの中に、はだしの子どもが居ると自分は靴下が履けない。存之氏は、「（幼い頃から）普通の人以上に痛みを感じる人で、何かそういう感性を持って生まれて来た人であるという印象がある」と言う。

そして、小学校六年生の時に辻にとって、生涯忘れられない出来事が起こった。このことを辻自身は次の様に語っている。

> 子供の頃の思い出の中に今も忘れ難いものがあるんです。小学校六年生の時でした。非常に仲の良い友達、佐藤和一郎君というんですが、その家はまた特別貧乏でした。その和一郎君のお父さんが亡くなりました。そこで私のとこはお寺ですから「今日は和一郎君のお葬式や。今日は学校へこないなあ。」と秘かに思いながら本当に悲しい思いで教室に入ったんです。そしたら、ちょうどあっちこっちたむろしていた同級生が、僕が教室へ入るなり「辻、お前とこ今日儲かるな。」とこう言うんですね。「儲かるなあ。」と言うんですよ。「何！」って怒ったのですが、「俺らは働いて汗をかいて生きてるけども、お前はなんや。人が死んでそれでお葬式があればあるほど儲かるやないか。それでお前は食って生きてるやないか。」こう言うんですね。小学校六年生でしたが、何かあの時の悲しみは今に忘れられないんです。それから「一体、職業ってなんだろう？」、子供心に「生きるって何だろう？」ということを考えるようになりました（辻 1998：161）。

これは、辻自身が「最初の問い」として語っているものである。

70 歳を前にした辻から、筆者（安田）は直接、この話をきいたことがある。死を掌ることの大切さと、そして、そこから「もうける」生業、つまり職業。ひとはひとりでは何もできず、分業がうまれ、そこから仕事が生まれていく。あるひとに、できない、困ったことがあるからこそ、仕事は存在するが、人の不幸もまた、仕事をうみだしていく。やるせない、いのちのありかたが、ここにある。このことと、辻は、向かい合って生きる。

「職業ってなんだろう」ということからは、在家としての可能性に向かわざるをえなくなっていく契機となっていく。さらに、「生きるって何だろう」という疑問は、辻が生涯をかけて解いてゆく巨大な問いとなってゆく。

そして、この問いを、辻は自らのみの問いにせず、やがて、児童福祉で出会う子どもたちとともに、向いあっていくことになる。

(2) 臨済学院専門学校（現・花園大学）へ

「坊主が嫌い、お経を読むことが又嫌いで」「とにかく逃げ出したい」と思っていた旧制の中学校

四年生、15 歳で終戦を迎える（辻 1998：49）。父親に「とにかく京都の学校へいけ」とすすめられ（辻 1998：49）、「それから、もうどこでもいい」という思いもあって（辻 1998：162）、京都の臨済学院専門学校（現・花園大学）に兄と共に入学する。

当時、辻は 15 歳。弟の存之氏によると、兄の大圓氏は、文武両道に加え、多くの趣味があり、それをすべて一流に極めるなど、華麗で、さらに人望が厚い親分肌の豪放な方であったといわれる。大圓氏は大学生当時、周りの方にご馳走をしてしまうなどと、派手にお金を使ってしまうことも、たびたびあったという。

大寺とはいえ生活はつつましく、二人分の仕送りとはいえ、多額な金額でない。兄のあおりを、辻は受けた。そのため、辻はかなり「貧しい」生活になってしまうときもあった。しかし、辻は兄に対して一言も文句を言わず、境遇に対して非常に素直に、時として、栄養失調にまでなっていたという。存之氏は、このエピソードを挙げて、辻は元来無欲、かつ非常に自分に厳しく、ストイックな側面があったと語る。

筆者（安田）は、辻から大圓氏のことを伺ったことがある。「地方の寺をつぐのは大変なこと」と語っており、また、ある時、西村惠信元花園大学学長から「先日、兄者にお会いしました」といわれると、辻は、はにかんだような、うれしそうな表情を浮かべていたことを思い出す。

更に特記すべきことは、この臨済学院専門学校時代に、辻は当時教鞭をとっていた柴山全慶（1894-1974 元南禅寺派管長 花園大学・大谷大学元教授）―昭和を代表する禅僧のひとりといわれる―と出会っていることである。辻は柴山を生涯の師と仰ぐことになる。辻は 19 歳で 1949（昭和 24）年 3 月に臨済学院専門学校を卒業する。そして、辻は「学校教員の免許状をもらう縁があって」、秋田の中学校の教員となった。

(3) 中学教師となるも、退職をする

辻は、中学校の教員を約 4 年間勤めている。その間、「教育というのは何だろうなあ」「教育の目的というのは一体なんだろうなあ」と、いつもいつも脳裏から離れずにいたが（辻 1998：49-50）、一方で「中学教師の時は『生きるっていうことは尊いことだ』とか、大きな顔をして言ってたんです」、と言っている（辻 1998：162）。

臨済学院専門学校を卒業してから 3 年、この頃は日本の集団就職のはしりの様な時代で、辻の担当していた子ども達も、東京へたくさん就職していった。辻は、その子ども達をおくりだすとき、「とにかく勉強だけはせえよ。これからの世の中は働きながらもどんどん勉強をやっていけるんだからな」、と言っていた（辻 1998：50）。

教師生活の四年目に、「たまに、いっぺん補導に行ったらどうだという様なことを言われて」東京へ集団就職をしていったたくさんの子どもたちを訪ねて、東京へいった。そのおり、担任をしていた子どもたちがいかに苛酷な労働生活を送っているか、ということを目の当たりにする（辻 1998：162）。

辻は社会科を担当していたのだったが、社会について、教科書通りに疑問をもつこともなく、子どもたちに教えていた。しかし、現実を目の当たりにして、その大きな落差に愕然とした。「なんか自分と人間関係を結んだことが、子ども達一人一人の人生に関わっているような責任を感じて」、中学校勤務も学期の途中でやめて、東京へ出た（辻 1998：50）。

いかに子ども達のつらさに胸が打たれたにしても、現在の生活を反故にして、東京に出ることは、並大抵のことではない。しかも、東京では、会社の寮にはいり、子ども達と一緒に寝起きする生活をしている。前述の存之氏の言葉である「幼い頃から、普通の人以上に痛みを感じる人で、何かそういう感性を持って生まれて来た人であるという印象がある」、と言うことがここに表れている。

しかし、後年の辻を知る人びとによれば、「いかにも辻先生らしい行動」ということになる。それは、辻の「思いたったら行動をする」「気負わない」というのも、辻の性分だからである。悲壮感にみちた行動のようにも受け取られやすいが、ご本人はもう少し無邪気に、じっさいは、とにもかくにも、からだが動いたということなのだろう。

また、児童自立支援施設を退職後も、辻は、高

齢者や障害者なども含めた人びとの健やかな生活の実現のため、自らの実践をもって、向かい合う。辻の「社会派」の行動については、別途の研究が必要とされるが、いわゆる仏教の教理や思想に社会問題への解決があるとする「社会派仏教」とは異なるものであり、仏教にみられる「社会性」からの行動ではなく、在家信者としての辻個人の実践が、社会的なものとなりあらわれていると筆者らは推察をしている。

なお、「社会派仏教」については、さらなる議論を深めていく必要があると思われる。本稿では、ここまでの言及にとどめる。

(4)「出家」と「在家」。。。その迷い

辻の在家としての基盤はできつつあるようにもみえるが、辻は自らに、大きな問題をかかえていた。それは僧侶になるという「出家」と、そうはならない「在家」という選択の問題である。辻は自らも「兄は寺を継ぐ宿命を担って生きたが、私はその後、花園の新生大学へ転入学するも中退して勝手な人生彷徨の日々を送ることになった」、と書いたくだりがある（辻 1998：220）。

なお、『同窓会名簿 1997 花園大学同窓会』（花園大学 1997）には、「花園大学文学部第１回卒業（昭和 23 年３月）」の欄に「辻光文」の名前がある。何故本人は「中退した」と言っているのに「卒業」となっているかという疑問は残るものの、これは率直に考えて、時期的に辻の中学教師時代から東京時代の初め頃に重なると考えざるを得ない[5]。

詳細は今後の調査に譲るとして、花園大学の基本的性格は、現在に至るまで臨済宗に基づく人材養成、なかんずく、禅宗僧侶養成の機関ということである。辻に臨済学院専門学校を卒業後、再び新制花園大学への「転入」と「中退」があったという事実の背後には、当時、「出家」と「在家」の間で揺れていた、辻の深い迷いが見え隠れする。そして、辻にとって「卒業」するということは、ほぼ臨済宗の僧侶になることを意味する。

存之氏によれば、京都での学生時代から、辻の純粋さ、そして求道性を高く評価する人々が現れていた。辻は当時、「今どきめずらしい青年」という感じであったようである。柴山全慶は、辻をぜひ南禅寺で修行させたいと考えていた時期がある。そして、このことで柴山は秋田の寺にもやって来たことがあるという。このようなこともあり、辻の父も、辻の僧侶としての将来を大変楽しみにしていた。

また、存之氏によると、他にも、自らの寺の後継を辻に任せたいと考える人は複数いたそうである。そのなかには、いわゆる「名刹」も含まれていた。ともかくも、当時、仏教界からの辻の引きは強かった。

一方、辻は、児童自立支援施設在職中の講演において、「秋田の山の中の寺で育ったのですが、坊主が嫌い、お経を読むことが又嫌いで“とにかく逃げ出したい”と思っていた時に終戦になりました」、と述べている（辻 1998：49）。このことについて存之氏は、辻は「仏教が嫌いなのではなくて仏教から離れてしまっている坊主が嫌い」なのであって、むしろ仏教への志向性は非常に強く、「釈迦の仏教だったら、本物だったら、裸足で全国を放浪して法を説くのが本当だろう」、というような思いが強かったため、以上のような心情であったのだろうと述べている。

次に引用するのは、おそらく辻が新制花園大学を中退して、それほど時を経ていない頃に書かれたと推定される柴山から辻へ宛てた手紙である。辻は「私が僧侶になり切れぬ悩みを訴えた時、次のようなお手紙をまた下さったのである」、としている（辻 1998：239）。

> はっきりと僧侶にならないならば、ならない態度を決して行くのが好いでしょう。今、教団は、従って既成教団は、押し流されつつある歴史の底に苦悶しているのです。いや、もう苦悶さえ十分する意志力を失いつつあるのです。このどうにもならぬ歴史のハンディキャップに立つ教団に生きることは、吾々が鋭敏な感情と純真な知性を持つものにとって、苦悶であることは当然でしょう。私はそれを十分認識した上で吾々の往くべき道を定めて行くより外に何ともならないと思っているのです。僧侶を止めると決したら、止めて

よろしい。はっきりと止めるがよろしい。僧侶になるならなるで、いやいや歴史に押されつつ生きる様な僧侶にならず、どこまでも職業的でない坊さんになって呉れと君に云うつもりをしていた。若し君が私の僧堂へでも来ていたら、私はヒョッとしたら生涯、寺の住職なんかさせない坊さんにしていったかも知れないのです。職業坊さんなんか五人や十人止めたって何でもない事なのです。

今の職業坊さんなんか止めてもやっても、そんなことに今の私はかかわる気はありません。只云いたい事は、如何なる態度で生きんとするのか―と云う内的な価値の問題です。単に俗人になって過ごすと云うだけならば、結局、職業坊さんと五十歩百歩、同じことなんだ、―僧侶を止めて―君が如何に頭の下がる、価値ある生活をして行くか―仏教の真実を如何に生活態度の上に持ち続けて行くか―そこに問題があるのです。それさえはっきりと見失わないで毅然として生きられたら、それで私はうれしいのです。

私も小さいとき寺の小僧となり、長年そのことで苦しみ悩み、今も教団の姿を見て、云い様のない義憤を感じているのですから―云い度いことは沢山あるけれども、最後の結論は前述のところにあるのです。よくかみしめて下さい（辻 1998：239-240）。

辻は、この手紙を引用し、「正に飯を噛んで嬰児を養うごとき慈訓であった」と述べる[6)]。柴山の言葉は、在家としての生き方を説くものであり、多くの人が共感をするであろう。しかし、「正に飯を噛んで嬰児を養うごとき慈訓であった」が、辻は安寧を得られたわけではなかった。

ただ、上の柴山の手紙は、後の辻の仏教徒としての生きざまに灯火をともすものとして、極めて重要であると考えられる。実際に、辻は、ここで柴山が述べていることを福祉の分野で具現化していったと筆者らは考えているが、それは、まだまだ先のことである。

(5) 東京での彷徨

ここでは、東京に出てからの辻について検討していきたい。

辻は、子どもたちをおいかけて、東京には行ったものの、無力感にうちのめされた。そのことが、のちの辻に大きな影響を与える。 在家としての出発のありかたが、ここから、うまれていったものと推測されるのである。

前述の柴山の手紙の引用の後、辻はさらに付け加えて「しかし、私はその後もさらに迷いの因縁を重ねて、出家ならぬ文字通りの家出をして、トラックの運転手をしながら東京の街を彷徨する数年があった。なぜか、もう生きていても死んでいてもそんなに価値あるとも思えぬニヒルな心境になっていた」、と述べている（辻 1998：240）。

辻の担任した集団就職をした子どもは、たいてい現・文京区白山界隈にあった印刷工場や製本会社で働いていた。辻自身は、ワークブックの会社を始め、様々な職を転々としながら、最後はトラックの運転手をしていたというが、暮らした場所は子ども達が働いていた会社の二階で、子ども達と一緒に寝起きする日々であった（辻 1998：163）。ところがある日、社長に「子どもらの待遇を改善してくれ」と迫って追い出されてしまうのである（辻 1998：51）。

辻自身の言葉を借りれば「いよいよホンマの浮浪となりました」ということになる（辻 1998:15）。この間、辻は「生きるって何だろうなあ」ということは、片時も頭を離れたことはなかった（辻 1998: 163）この時代のことを辻自身は次のように語っている。

他校から集団就職で来ていた子ども達も含めて二〇数名の子ども達の生活指導として、いっしょに食事をしたりしてすごす中で、ますます「生きる」という意味が、わからなくなってきました。ただ悲しさや淋しさだけの思いでいっぱいのあけくれでした。(略)「このまま年をとって、一体どうなるんだろう。『生きる』ということはいったい人間にとって何だろう」というようなことを考えている中で、

私自身、この子どもらに何も言うてやることが出来ませんでした。女の子達は大津の紡績工場に就職していました。その子らからも、あの頃の労働条件の中では、ただ働いて夜はもう疲れて寝る、毎日毎日同じことのくり返しで「先生、生きるということはどういう意味ですか。教えてください。」という手紙が来ました。私にはそれに応える力がありませんでした。仏教の畑の中で育って「人間が生きるということは、非常にすばらしいことだ」と教えられていたのですが、現実には一つもありがたく思うものもない。もう、すきさえあれば死にたいという気持ちが多かったのです（辻 1998：50-51）。

このような中で、母の葉書が辻を支える。辻は、秋田から東京に出る時、「若い時の苦労は買ってでもせいっていうから、体大事にして頑張んなさい。やりたいことだけをやってきなさい」、と言って送り出してくれた母の手紙についてのエピソードを次の様に記している。

ところが母は毎日の様に葉書をくれたんです。三年間、毎日毎日、葉書は必ず来ました。日にち遅れの天気予報の様ななんでもない葉書なんですが、母親にとっては、先もわからずただ飛び出していく息子を憐れに思ったのか、三年間、本当に葉書をくれました。だから、途中でフラフラになった時も、「葉書を見てからでもええやないか。」っていうような思いで下宿へ帰ったことも何べんかあります（辻 1998：163-164）。

ここで辻自身が語っているところは何を意味しているのであろうか。

当時、辻は極めて激しい精神的煩悶にあったことも想像に難くない。一方、当時、東京に住んでいて、共に行動することも多かった存之氏は、辻はそこまで追い詰められていた、というよりも「本物の生きかたを求めていたのではないか」、と語る。

秋田から東京に出て来たことに関しても、存之氏は「必要のある所へ赴く、そんな感じだった」、と言う。しかし、必要のあるところでの自分は、限りなく無力である。

そして、「生きるとは何であるか」という問いは、まさしく仏教の大問題であるが、辻はその問いと、以上のようなきびしい日常の生活のなかで、向いあうようになっていく。

(6) 仏教復興運動とのかかわり

辻は神田にある梱包会社に就職し、三輪オートの資格を取って働き始める。そして、いくつかの仏教にかかわっていった。

神田には、戦前から仏教復興運動（真理運動）を展開していた友松円諦が、戦後無宗派の寺院として設立した神田寺があった（友松・山本 1975）。そこでは在家仏教の運動が盛んになっていた。「場所的な縁と精神的な欲求」もあり、辻は神田寺に出入りする様になる。後に神田寺の青年部長であった紀野一義が独立して、在家仏教徒の団体である真如会を設立した（紀野 1967）。神田寺の多くの青年達は、紀野と行動を共にしたというが、辻も真如会に参加している。

神田寺の友松円諦は、そもそも「宗派」というものに疑問を持ち、「真理運動」を展開していた人物であり、神田寺も無宗派の寺であった。また、友松の弟子で真如会を立ち上げた紀野一義も宗派の垣根を越えた在家仏教の活動を展開していた。紀野は、一般の人たちに向けて、仏教をわかりやすい言葉で誠心誠意伝えようと務めて来たという（紀野 1967）。なお、紀野は、当時、柴山と交流があり、柴山に評価されていた人物でもあった。

臨済宗は、他宗へ一定の敬意をはらう宗派である。辻が、さまざまな仏教に触れていく機会も多くなったのであろう。なお、存之氏によると、後年、紀野は辻を訪ねて児童自立支援施設に何度か足を運んだという。

しかし、「生きるとは何か」を捜し求めて試行錯誤していく辻の中で、さまざまな仏教もまた、すぐに問いにこたえるものではない。

辻と神田寺・真如会との関わりが、どのようなものであり、その後の辻にどのような影響を与えていったかについては、今後解明していく必要があ

る。新興の在家仏教の運動の中に身を置いていた辻の感じるところは何だったのか。「坊主が嫌い」で釈迦本来の仏教を思い描きつつも、自分の中に絶えずある大きな「問い」が解けない格闘の日々の中、辻は仏教徒として生きる道を模索し、存之氏の言う様に、自分にとっての「本物の生きかた」を求めて試行錯誤していたことが、ここにもあらわれているのだろう。

(7) 柴山の手紙・・・苦しんで生きましょうよ・・・

そして、そこには、先の柴山の手紙にある「仏教の真実を如何に生活態度の上に持ち続けて行くか」、という大変大きな課題もあったに違いない。ここは、辻にとっての「職業」ということとも、深く関係している。

いくつかの仏教とかかわった辻ではあるが、この東京時代も、辻は柴山と何度も手紙のやりとりをしていた形跡がある。辻は、「その頃、再三東京へ下さった老師のお手紙に次の一文がある」、として、柴山の手紙を紹介している。

> 拝復。お手紙拝見いたしました。何か余り悲痛に感じられる手紙で、何と返事を書いて好いか分からぬ気持ちでした。「苦痛はどの様に対処すれば好いのか」という問いは、実は答えられるものではありません。無論、苦痛にもいろいろあることにきまっています。然し、本当につきつめた、生命をかけてもという苦痛は、他の如何なる人も答えられるものではありません。それはその人のものであっても、他の人のものではないからです。無慈悲なようだけれど、自分で苦しんで苦しんで、絶望のどん底に逆落としになる迄苦悶し尽くすことより外に道はありますまい。親鸞聖人の悲痛な叫びと臨済禅師の悲痛な叫びを知っているでしょう。それから先に、暗があるか光があるか、そんなことかれこれ分別したとて何になりましょうか。来るものは来るにまかせ、開けるものは開けるにまかせ、そんなことに何をとらわれることがありましょう。またとらわれて何になりましょう。只身も心も投げ出して苦しむより外に道はないのです。苦しくても、悲しくても、血の涙を流し続ける、それだけより外ありません。それから先は貴兄の問題で、私の関することではありますまい（辻 1998：240-241）。

この柴山の手紙の極めて厳しい内容から、当時の辻の精神的煩悶の激しさを推測することも可能であろう。この柴山の手紙は、やや唐突につぎのように続く。

> 「究極」が二つある筈はないではありませんか。真宗と禅宗とどこがちがうというのです。情性的であろうと知性的であろうと、そんなことどうでも好いのです。禅的であろうと真宗的であろうと、そんなことどうでもいいのです。安楽になろうといっても、苦悩よ来たれといっても、そんなことどっちでも好いのです。そんなこと皆、空ごとたわごとではないですか。そんなこと云って見たって、何一つ勝手になるものですか。それ程どうにもならぬ浅ましい、悲しい人間なのです。吾々お互いは。ああ、でも私は今日もさんさんたる太陽の光に包まれました。
>
> 苦しんで生きましょうよ。私も同じ様に苦しんでいるのです。私は今、自分の人生を、行きっぱなしとも再び帰らないとも、短いとも長いとも思って居りません。苦しんで生きましょうよ。兎に角ご無沙汰ばかりしていますが、いつも何うして過ごしているかと心配しています（辻 1998：241-242）。

手紙の流れからすると、ここに突然「究極が二つある筈はない」ということ、また「真宗と禅宗」に関する話が突然出て来るのは、いささか不自然である。おそらくこれは、辻が柴山に宛てた手紙の中に「真宗」に関連しての問いがあったものではないかと推測される。柴山がこの手紙でそれに答えていると考えるのが自然であろう。

辻は、この柴山からの手紙について、「私は、この『二月十五日涅槃忌の夜』と認められたお手紙を

暫く忘れられなかった」、と記している（辻 1998：242）。仏教には、「罪業を盡す」という言葉もあるが、辻は、徹底して「苦しみを苦しみ抜く」というこの苛酷な課題を、この東京時代に遂行しつつあったのであろう。また、「究極に二つある筈はない」ということ、「安楽になろうといっても、苦悩よ来たれといっても、そんなことどっちでも好い」ということを、辻は生きていく。

やや繰り返しになるが、出家であろうと、在家であろうと、苦しんで生きていければよいということである。また、事態などもともと所与のものであり、そのことにとらわれる必要がないということは、翻って、ひとの生きる場は無限であるということである。これは、まさしく、在家としての仏教徒の大いなる肯定である。

(8) 東京から、一燈園にいくも「半燈」園となる

このような時代を経て、辻は、くらしのなかでの、実践に目をむけはじめる。在家仏教徒としての道のりを歩みはじめていくといってよいかもしれない。

東京生活の三年目、辻は「『生きる』ってことはどういうことなのか、もう少し何か自分自身で深めたいっていう思い」もあり（辻 1998：164）また「正しく理屈だけで一燈園に憧れて」（辻 1998：16-17）、秋田には帰らず京都は山科の一燈園にやって来る。

一燈園とは、懺悔や奉仕や「托鉢」の生活を行い、便所掃除などの実践で知られる、西田天香が開始した生活運動ともいえる団体である（西田 1921）。多くの既存の仏教教団とも親和的であり、現在でも、企業などの研修で、一燈園の実践がとりいれられることもある（三浦 1999）。

しかし、結果としては、辻の言葉で言えば「然し『棄恩入無為』などという厳しい生活が理屈や一時的情熱で生き得る筈がない」（辻 1998：17）、ということで終わる。辻は一燈園ついて次の様に述べている。

> 京都に、今、山科に一燈園っていうとこがあるんですが、便所掃除をさせていただいたり、路頭と称して京都市内のいろんな旅館の残飯なんかを集めて、当時豚を百匹ほど飼っていました。わら小屋に何日か住んでいました。ところが当時は西田天香さんって方もまだ元気で講演にまわってられたんですが、私自身はそういう求道者、いわゆる本当に道を求めるっていうようなそんな覚悟もできていない。だから一灯じゃなしに半燈園でした（辻 1998：164）。

ここで改めて注目したいのは、秋田を出て以来、神田寺、真如会、一燈園と辻が関わった仏教は、全て既存の教団ではなかったという事実である。東京時代に触れていたであろういくつかの宗派の「教え」についてはともかくとして、辻は教団の内側に入るつもりにはどうしてもなれなかった様子が伺える。

そして、一燈園である。辻が「私自身は、そういう求道者、いわゆる本当に道を求めるっていうようなそんな覚悟もできていない。だから一燈園じゃなしに半燈園でした」、と述べているのはどういうことなのか。

この一燈園の「懺悔」「托鉢」の「厳しい生活」であるが、その後、長きに渡って児童養護施設、児童自立支援施設での住み込みの生活を続けた辻である。むろん、その「厳しさ」の質は大きく異なるであろう。しかし、一燈園での「厳しい生活」も、辻にもその本来性から言えば不可能ではなかったはずである。

ともかくも、辻は一燈園では、腰を落ち着けなかった。落ち着けることが出来なかった。「正しく理屈だけで一燈園に憧れて」いた辻ではあったが、ふたたび、新たな道をさがし、放浪をしていく。また、辻には、臨済禅の修行体系や一燈園の懺悔・托鉢にはあきたらぬ別のかたちの生きかたを求める強い動機があったともいえよう。そこには、辻の他人の困りごとを、そのままにしておけないという、性分もあったのではないだろうか。

このことが、さらに花園大学での生活をへて、さらに、世間でのくらしへの道、つまり、在家仏教徒としての生きかたにつながっていく。

(9)「半燈」を生きる－最後の花園大学での生活へ－

一燈園を「落ちこぼれて」「半燈」園となった辻は、やはり、柴山の下へ行く。そしてその柴山から「月謝を出すからもう一遍学校へ入ったらどうだ」、と言われ（辻 1998：164)、「悪いけど、もういっぺん勉強しなおすわ」、と東京の子ども達に詫び（辻 1998:51)、花園大学の仏教福祉へ再入学することになる。今度の専攻は福祉であり、ここからも、辻が、在家への道を、ますます、歩みつつあることが理解できる。とはいえ、この時の在学は4年間ではなく、短い期間であったと推定される。

そして、ここで大切なことは、柴山は「月謝を出すからもう一遍学校へ入ったらどうだ」、と言ったのであって、辻に対して「出家」については口にしていないことである。後に辻に結婚相手を紹介し、結婚を勧めるなど、むしろ「世俗」で、在家として、生きてゆくことを後押ししていることが挙げられる。

結局、辻は、また、花園大学にもどってきた。花園大学を卒業し、秋田へ、そして秋田をとびだしてから、東京へ…この数年間は、結果としてのみ、みると「悪あがき」ともいえるものだったかもしれない。無に帰し「無駄骨」となったということなのであろうか。しかし、いずれのときも、ひとは、「無駄骨」とともにあり、「無駄骨」もまた、そのひとの「骨」である。

かねてみてきたとおり、柴山の教えのなかには、出家か在家かにかかわらず、仏教徒としてのありかたがあり、在家としてのありかたを、辻は、ここからも、得ていったのであろう。よりよい出家を輩出するだけでなく、よりよい在家仏教徒も、輩出する。やはり、筆者らは、ここに柴山の「ほんもの」としての禅僧をみる。

仏教は、仏、法、僧（僧団・サンガ）としてなる。花園大学は、過去も現在も臨済宗に基づく人材養成機関であり、専門道場ではないとはいえ、また、僧（僧団・サンガ）の側面をもつ。柴山の意思は、辻にここに身をおき、また、歩みを続けよということかもしれない。

花園大学の役割は、臨済禅におけるよりよい雲水（修行僧）の養成の一環をなすとともに、よりよい在家信者の養成にもある。臨済宗の説く道は、平凡なありふれたくらしの中においても、よりよい生き方を自らさぐることの重要性であって、その宗教が人間尊重に立つかぎり、いかなる宗教の信者であることとも対立しない。また、これらの自覚のなかにいつつあれば、在家信者の自覚なども、必要はないのである。辻の「半燈」であるとした生き方も、花園大学は滋養していく。

なお、辻は、何度もの花園大学で、どのような学びをしたのであろうか。現在も、花園大学への思いを口にし、「愛おしく」思っている辻である。辻の学びの道を、もう一度、たどることは、本学の未来を探るとともに、そして、大学教育全般のあり方の示唆につながっていくであろう。

(10) 在家として生きる－子どもとともに、いのちを、生きる－

辻は「出家」ではなく「在家」として生きていくことになる。しかも、辻は禅宗の居士になった訳でもない。辻が「在家」として生きていくということは、臨済禅の坐禅と公案という修行体系の道をいかなかったということをも、意味する。

しかしながら、辻にとっての「行」とは何だったのか。辻は後年、児童自立支援施設を退職するおよそ3年前に次の様な発言をしている。在家仏教徒の道も、豊かなものであったのであろう。

> 禅とは、仏教とは何であるのか。私は今にして寺に生まれ、この父に育てられ、花園に学ばせて貰った因縁を此の上なくありがたく又、幸せに思うものである。端的に言って不良児も非行児もつまるところ寂しい孤独な子の異名でしかない。もし禅が心の名であり、生活であるというのなら、こうしてこの子等と精一杯生きるいのちがそのまま仏教でなければならぬと思うものである（辻 1998：221)。

この辻の発言は、辻にとって行とはなんであったかを、示しているのではないだろうか。在家信者の道も、禅仏教徒として、豊かなものなのである。

辻が児童福祉と職業人として児童福祉にかか

わっていく辻の行動を考察し、そして、禅仏教とのかかわりをみていくことが大事であろう。このことの探求が、次の課題となる。

6. まとめと今後の課題

辻は、もとより、よりよい生き方を求める気持ちがたいへん強かったひとである。さらに、辻は、寺の子どもとして生まれ、生老病死が間近にあり、それは、仏教への深い傾倒になっていった。それと、同時に、困ったことのあるひとや、つらい立場にあるひとのことを、他人ごとにはできない性分もあった。

柴山の「来るものは来るにまかせ、開けるものは開けるにまかせ、そんなことに何をとらわれることがありましょう。またとらわれて何になりましょう。只身も心も投げ出して苦しむより外に道はないのです」、という言葉は、仏教徒として生きる場は、無限にあるということにもつながり、辻の在家仏教徒への道として、実現されていくことにつながっていく。

さらに、本稿では、辻の在家仏教徒として生きるまでの道のりを考察したが、ふりかえると、辻の生き方が、自分及び、向き合うひとや、ことがらに対して、恐ろしいほどに真摯であり、そこには「勢い」というものまで感じさせることがわかる。

この「勢い」こそが、実は、禅仏教徒のひとつのあらわれであるかもしれない。この「勢い」が対象そのものへの深い志向、そしてそれが実現していく「現場」への強い志向となり、実践となってあらわれ、さらに、その実践からさらなる実践が生じ、それらが重なり合い、螺旋のように、展開していく。禅について深く学ぶとともに、この「螺旋」についての解明に向かうことは、今後の課題である。

なお、くりかえすが、辻の福祉分野での実践を探求することも、今後の重要な課題である。辻は、子どもの指導に対して、膨大な資料を残しており、この資料の解明は、在家仏教徒のありかた、禅と福祉の実践、さらには、児童福祉をこえ福祉全般に、大きな示唆をもたらすだろう。

とはいえ、辻に指導を受けた本学の卒業生が、辻をどのように仏教徒として認識しているかというと、実は、「お寺の出身の先生」くらいしかなかった。ある卒業生は、大病をし、辻の指導を受け、辻の言葉を精神的な支えにして、卒業論文にまで引用している。だが、その学生ですら、同様であり、辻からは、仏教の話をきいた覚えはないという。

深く仏教に帰依しながら、仏教の用語では語ることはない。「人の残した言葉より、その人の歩んだ具体的な生き方の全体が示す意味の方が、宗教の、とりわけ実践を重んじる禅宗の立場にとってはるかに重要なはず」（沖本 1996：57）、という、沖本の言葉に、ふたたびもどり、今後も研究をすすめていくこととする。

謝辞

筆者のうち、安田三江子から、本研究の問題意識にも関連することでもあり、やや長くなりますが、謝辞を述べさせていただきます。

まずは、辻光文先生、実弟の辻存之様に心よりお礼を申し上げます。

本学はもとより、臨済宗関係者におかれましては、たくさんの方がご存じの辻光文先生です。皆様におかれましては、この研究の意義を、どうぞご理解いただきたく、よろしくおねがい申し上げます。

辻先生は、社会福祉実習･演習、人権教育研究センター研究員、学生相談室カウンセラーなど、さまざまなかたちで本学にかかわられた。すべて、非常勤であり、いっさい役職にはついておられない。しかし、筆者には、本学の教職員の多くが、辻先生に、敬愛の情と信頼をいだいているよう感じる。

筆者は、困難をかかえる学生の相談をしたり、一緒に実習巡回にいったり、たまたま、一緒にバスで帰ったりと、ごくごく日常のなかで、辻先生とご一緒させていただく時間があった。しかし、それぞれの時間は短く細切れであった。

だが、退職なさり、年数がたった今こそ、辻先生が、自らのなかで生きていることを実感する。つい先日のことである。筆者は、ある講義にゲストをよんだが、学生がふざけだしてしまい、後部座席のそのまた後部に椅子をもちだし、すわりはじ

め、騒がしくなってしまった。ゲストの接待もあり、とても困った。

そのとき、辻先生の光景が、脳裏に浮かんだ。それは、かつての新入生オリエンテーションのときのことであった。本学はバリアフリーがすすんでいるが、それでも、当時、車椅子をもちあげなくてはならない場所があった。辻先生は、その学生の車椅子を、他の学生に手伝ってくれということなく、自分で、もちあげられようとされた。それをみた近くの学生が、思わず、走り寄ってきた。そこに、風が吹いたように感じた。

筆者の場合は、辻先生のようには何もいわずというわけにはいかず、学生に口頭で注意をしてしまったが、それでも、椅子を自ら、片づけた。そうしているうちに、やがて、社会人学生の方が手伝ってくださり、数名の学生も続いてくれた。

また、筆者は、立場の上の方や、有名な方にお会いするとき、つい、引け目を感じてしまう。そのとき、「辻先生だったら、こんなふうには思わないだろう」と、居住まいを正す。困ったときにとっさに、思い浮かべる方がいて、本当にありがたいことであると感じる。

現在、辻先生は、思考能力や判断力には、問題がないものの、記憶にやや安定性がない。ご病気もされ、体調に波がある。児童自立支援施設で、同僚だった竹沢喜心氏のご配慮を得て、筆者は、辻先生と、電話でお話する機会をいただけた（筆者のうち沢野純一は、実弟の辻存之氏のご好意により、辻先生にお会いすることができている）。

電話でのお話のなかで、筆者（安田）のことは、「思い出せないなあ。たくさんのことを忘れてしまった」といわれ、「辻先生は、何があっても辻先生じゃないですか」という筆者（安田）に、「そうやなあ。先に生く（いく）ものだから、まさに、先生やなあ。。。。」とカラカラと笑われた。

そして、そのあと、真剣な声になり、自ら、「私のことは、何を書いても、どのような視点で書いてもかまわない。見せる必要などない」といわれ、また「なんなら、尻の穴まで、みせましょか。。」と、また、カラカラと笑われた。存之氏は、この話を「いかにも兄貴らしい」とお笑いになる。もちろん、辻先生は、存之氏、竹沢氏、津崎哲郎氏、また、交流が深かった近隣の方などのことは、十分、覚えていらっしゃる。

この「尻の穴までみせましょか」は、実は、深い意味のある言葉である。かつて、本学元教授（現神戸市外国語大学教授）の村本詔司氏が、本学元学長山田無文老師に、ロールシャッハテストをして、その結果を、論文としてまとめたことがあった（村本 1997）。山田無文老師は、大変著名な方である。村本の論文は、「禅僧 Y 老師」となっているが、だれもが、だれかわかってしまう匿名の仕方である。

このことを知って、「そんなことをしていいんですか」と驚く筆者にたいして、辻先生は「禅僧たるもの、そんなことにこだわらない」と、これも、カラカラと笑われた。

また、昨年、亡くなったスティーブ・ジョブス氏も同様であった。ジョブズ氏は死期を間近に感じ、ウォルター・アイザックソン氏に伝記を依頼したおり、内容に口をはさまず、あらかじめ見せる必要さえないと告げた（Isaacson=2011：3）。ジョブズ氏も、禅に深い思いをよせた一人である。辻先生とジョブズ氏の一致。これは、単なる偶然ではないだろう。

良寛は、「うらを見せ　おもてを見せて　散るもみじ」と詠み、「散る桜　残る桜も　散る桜」とも、詠んだ。後に生く、私たちも、やがては散っていく。単純な礼賛ではなく、辻先生のありかたを研究として残すことは、不遜ながら、辻先生の禅仏教者としての実践の一環をなすものでもあるとも思える。そして、この研究のありかたは、事例研究の普遍的な意義でもあると考える。

このことは、最近の個人情報保護の強化などとは、別の文脈であるように考える。現在では、人間どうしの境界線をたいへん強くひくようになってきており、他者と分離して個人を考えることの必要性が強調されるようになってきた。現在の福祉も同様である。必要な側面があることも事実であるが、他人の痛みを自らの痛みとしない福祉に未来はあるのだろうかとの根源的な疑問が生じてくる。「散る桜、残る桜」も、同じ木に生きている。

禅は古く、そして、いつも新しい。まずは身近だった辻先生から、教えていただきたいと思った。これこそが、本研究の深い動機である。

本稿は、2012年度花園大学特別共同研究費助成（安田三江子、津崎哲郎、澤野純一）を受けています。ここに記して謝意を表します。

注

1）たとえば、双日社長加瀬豊氏も長岡禅塾を通じて禅に関心をよせている（日本経済新聞2012年８月６日 夕刊）。長岡禅塾は、総合商社の双日の前身のひとつである日商岩井の創業者岩井勝次郎氏が禅を通じた人材育成の重要性を鑑み、設立をした学生のための修行道場である。

2）教護院は、1998年の児童福祉法の改正により、児童自立支援施設と名称が変更された。辻の在職中の施設の名称は、教護院であったが、名称変更にともない、本稿では、児童自立支援施設という名称を用いる。

3）本稿では、引用は、岩波文庫版（1989）による。

4）辻の実践の場となった児童自立支援施設では、「小舎夫婦制」をとっており、辻も、夫人の須重子氏とともに、住み込んでいた。夫婦小舎制では、一組の夫婦がそれぞれの寮舎で、10人程度の子どもを担当し、寝食をともにしながら、養育にあたる。子どもは、このような支援を通じて家庭の役割を学び、自立につなげていく。職員の仕事は、実質的には、24時間体制であり激務である。そのため、職員のなり手が少ないことが問題となっているが、児童福祉における夫婦小舎制の役割は大きいとされる（小林・吉岡2011）。

5）かつての花園大学は、学生異動が、文科省の指導が厳しい現在より、柔軟であったようである。筆者（安田）は、かつて、辻が、河野太通老師（現、臨床宗妙心寺派管長）を、先輩だと思っていたら、老師は、自分の方が後輩だと思っており、調べてみたら、同級生だったといって、笑っていたことを覚えている。この柔軟さの背景には、僧侶を養成する僧堂との連携もあるだろう。また、最近は、新入生の秋入学の必要性がいわれる。有名大学の秋入学制度の導入は、大学の上に、さらなる大学をつくる動きであり、大学間格差を拡げるものである。そのため、一概には賛成できない。しかし、学びの場としての大学の「柔軟性」は大事である。その意味では、かつての花園大学には、重要な「柔軟性」があったともいえるのである。

6）『無相大師遺誡』には「先師飯を嚼んで嬰児を養えばなり」、とある（禅文化研究所編1995）

文献

紀野一義（1967）『いのちの風光　現代に生きる仏教 』筑摩書房

小林英義・吉岡一孝編著（2011）『児童自立支援施設の子どもと支援：夫婦制 . ともに暮らす生活教育』明石書店

楠恭（1987）『妙好人随門』光雲社

三浦隆夫（1999）『一燈園　西田天香の生涯』春秋社

村本詔司（1997）「禅僧Ｙ老師のロールシャッハ反応」『ロールシャッハ研究』金子書房 , Vol.XIX,145-162

中村元（1949）『近世日本における批判的精神の一考察』三省堂

西田天香（1921）『懺悔の生活』春秋社

小倉栄一郎（1990）『近江商人の系譜：活躍の舞台と経営の実像』社会思想社 現代教養文庫 , 133

沖本克己（1990）『禅の思想とその流れ』世界聖典刊行協会

司馬遼太郎（1994）『街道をゆく 34 大徳寺散歩、中津・宇佐のみち』（朝日文庫）

鈴木 大拙（1948）『妙好人』大谷出版社

友松諦道・山本幸世（1975）『人の生をうくるは難く　友松圓諦小伝』真理運動本部

辻光文（1998）『いのちのかけら－生きているだけではいけませんか－』クイックス

辻光文（1999）「問題の子どもも大人も子どもの時の問題として」『非行問題』205号

辻光文（2002）「親も子もともに－いのちを思う－」『更生保護』53巻８号

辻光文（ 年月不詳 ）「理事無碍－福祉とはいったい何か？」『花園大学ふくし』

辻光文（年月不詳 ）「教室と現場－一つの期待－」『花園大学ふくし』

和田佳代子・辻光文（1984）『とまどい：登校拒否を克服した少女の日記』ミネルヴァ書房

禅文化研究所編（1995）『臨済宗勤行聖典・第一巻』

Walter Isaacson（2011）*Steve Jobs*, Simon & Schuster（= 2011 井口耕二訳（2011）『スティーブ・ジョブズ』講談社

Weber,Max（1920）.*Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus*. Tübingen,Verlag von J.C.B.Mohr. マックス・ウェーバー（1988/1989/1991）大塚久雄訳『プロテスタンティズムと資本主義の精神』・岩波書店 ,1988; 岩波文庫 1989; ワイド版岩波文庫 ,1991.